に大きな深い谷を隔てゝ、種々な形をした山巒が一面に高く低く連つてゐるのを目にした。あるものは鎗の天を刺すやうに尖り、あるものは佛の端坐してゐるやうに欹ち、またあるものは大きな怪鳥の翼でもひろげたやうに連り合つて、千熊萬様殆ど狀することの出來ないほどであるのを目にした。それは日本アルプスあたりの高山の連亙を見たやうなあゝした偉大と壯觀とは、それは其處に望むことは出來なかつたかも知れないけれども、兎に角に碧く晴れた空を地にして、捺したやうにその巒峯の連つてゐるのを見るのは、何とも言はれない快さを私に誘つた。『ふむ！成ほどこれは奇觀だ！』私はかう言はずにはゐられなかつた。

『成ほどこれは好い！』

M君もかう言つて、ポケツトからその寫生帖を取出した。

その眺望臺はたしか歇性樓と呼ばれてゐるが、その山に面したところに、小石の入つてゐる長方形の旗があつて、その中に、丸い尖つた山の形をしたものを置き並べて、それに一々に山の名を記し、それを本物の山と比べ合はせて見れば、あれは何山、あれは何山とはつきりとその位置を知ることが出來るやうになつてゐるのを私達は見た。『これは面白いね。朝鮮人のやりさうな考

へだね？』こんなことを言ひながら、その傍に寄つて行つた私達は、それからそれへと山を引き比べて合せて見て、容易にそこから立去らうとはしなかつた。『ほ！あの尖つたのが觀音峰だと思つたら、さうぢやないんだね？あの其の大きい奴がさうだね？』かう言ふものがあるかと思ふと、『あゝあれが、あの高いのが毘盧峰だ。さうすると、あの外に外金剛の九龍淵があるわけだね？そしてそこに間道があるツていふぢやないか。そこを行けば、わけなく行けるといふぢやないか？何でも三四里ぐらゐしかないツていふぢやないか』

かう誰かが言つたのをM君は捉へて、

『さうかね？そんな道があるのかね？』

『何でも、鮮人でも、そこを知つてゐるものは、たんとはないさうですけれども、そこを抜けると、非常に近いといふことですよ』

『それは、一度通つて見たいもんだね？』かう傍からM君も言つた。

私は深い深い山の中を想像した。谷から岩を傳はつて行きさへすれば、峯から峯を渡つて行きさへすれば、存外いろいろな路があつたり、色々な奇勝が藏されてあつたりする山の中が想像さ

れた。尠くとも、山を眺める位置だけでもいろいろなところがあるであらうと思はれた。高山に登る鏈でも準備して岩角から岩角へと傳はつて行つたならば、それこそまだ世にあらはれないところが澤山に澤山にあるであらうと思はれた。毘盧峰のすぐ下のところにある尖つた山からは、白い雲が簇々として巴渦を卷くやうに漲り颺つた。

九

表訓寺まで戻つて、もとの道を溪に添つて進むと、やがて五六町で、内金剛の中で一番すぐれてゐると云はれてゐる萬瀑洞の入口へと達した。

成程それはすぐれた山水と言つて好かつた。第一、兩側の岩山が見事であつた。次ぎにそこらに一面に横はつてゐる岩石がめづらしかつた。そして綺麗な碧い水が潺湲としてその大きな扁平らな岩の上を流れた。

私はかねて知つてゐる山水を一番先にそこに當てはめて見た。何處だらうか。何處に似てゐるだらうか。何處の山水が、また何處の溪谷がこれに匹敵するであらうか。瀞八町か？貌鼻溪か？それとも鹽原の箒川の溪谷か。日光の深澤か？この數谷の中では、それは日光の深澤が感じが一

内山萬瀑洞

番近いであらうと思はれたけれども、しかもあたりの雄大さに於ては、とても彼、此に及ぼうとは思はれなかつた。深澤は水量に於て勝つてゐるけれども、とてもこの複雑した岩石の奇觀と穹窿を蔽ふ樣な峯巒とを持つてゐなかつた。私は獨語した。『さうだ、丁度、あの日光の霧降の瀑底に似てゐる。あの感じに似てゐる。あれを數十倍大きくしたならば、丁度この谷と同じものになるだらう。さうだ……あの霧降の瀑の水の量の少いさまにも似てゐる。あの岩の上を遊び歩くことの出來るさまも似てゐる。それからあの日光の裏山の志津から太郎山に行く途中にある溪谷にも似てゐる。さうさな、あの谷は何と言つたつけな、閻魔の谷と言つたつけかな！』こんなことを考へながら私は徐に岩石の間を歩いて行つた。

溪が一つ左から來てそこで落ち合つてゐる。潺湲としてゐる。いかにも見事である。それに、このあたりに來ると、鮮人の來り遊んだものゝ名が到るところの岩石に刻まれてある。大きいのもあれば小さいのもある。ことに、一番目についたのは、崔松雪堂といふ赤く色が入つてゐる文字である。何でもそれは京城に有名の妓生の名で、此處に限らず、外金剛にも海金剛にも、到るところにその名が刻まれてあるといふことであつた。私は內地の神社や佛閣に張つてある狹斜街の人達の名札を思ひ出した。

『成ほどこゝは好いね！』

默つてゐたM君もかう言つてあたりを見廻すやうにした。

『しかし、洋畵にはなるまい？』

『さうですね？』 君は考へて、『スケツチにはなるでせうけれども、この大きな感じは洋畵にはなりますまいな。洋畵よりは日本畵ですな？』

『さうでせうね』

岸頭にある路をたどるよりも、岩石を傳つてのぼつて行く方が、その方が便利なので、皆なが

それからそれへと岩石を踏んで行くやうにした。次第に岩石と水と戰ひ合つてゐるさまが、その美しさを、その見事さを、その巧さをあたりに展げた。場所に由つては、かなりに高い瀧津瀨をつくつてゐるやうなところもあれば、滑らかな褐色の一枚岩の上をさら〳〵と爽かな流れに落ちてゐるやうなところもあつた。私達の心はいつとはなしに全くその山水に引寄せられて行つてゐた。

ところどころで立留つて鉛筆を動かしてゐたM君のノウトブツクをあるところで覗へすと、そこには溪橋から見た岩のさまだの、岩と岩と並び合つてゐるところだの、尖つた峰巒が谷を塞ぐやうにその前にあらはれ出して來てゐるさまだの布帛をひろげたやうに瀑がひろがつて瀧ぎ落ちて來てゐるさまだの、丸木橋が岩から岩へと組みわたしてあるさまだのが、一つ一つ巧に寫生されてあつた。誰も彼ももはやあたりの風景について批評がましいことは言はなくなつてゐた。

一〇

それは譬へて見れば、餘り多くない水が岩石の間に溜つては落ち落ちては溜るといふ風で、內

地の溪谷のやうに、水量があまり多くつては、また底が土か粘土では、到底かうした奇景を呈することは出來ないといふことが次第に私達にもわかつて來た。從つて此處では、水の少いのを決して憂ひとはしてゐないのであつた。水が少ければこそ、底が石であればこそ、この美しい潭が自然に出來て行つたのであつた。

單に潭として考へて見る。內地の何處にかうした面白い潭があつたであろうか。潭の美しいのでは、尾張の玉野溪、陸中の嚴美溪、紀伊の北山溪などであつたけれども――それは北山溪の瀞八町の深潭だけはこの金剛山中の諸潭に比しても決して劣りはしなかつたけれども、その他では此處に及ぶものは何處に見出されるであらうか。

『君、この山の溪谷の美は潭の美と言つて好いね？何とも言はれないぢやないか』かう私は先に歩いて行くM君に言つた。

『本當ですね？』かうM君は言つたが、そのまゝぐんぐんと石を越え岩を攀ぢて、右の路を上へ上へとのぼつて行つた。

『何處へ行くんだね？』

『あそこでせう！』かう言つて、M君は上を指さした。見ると、そこには先に行つたボウイ達が樹に凭り石に縋りつゝ上へ上へと猿のやうに登つて行つてゐるのを目にした。否そればかりではなかつた。その上遙かに、大きな危岩に凭りかゝるやうになつて、一軒の家屋の高く小さく仰がれるのを私は見た。M君の話では、それが普德窟で、何うしてもそこまではのぼつて行かなければならぬといふことであつた。

爲方なしに、喘ぎ喘ぎ私はのぼつた。何遍私は途中で立留まつて休んだか知れなかつた。これではとても望軍臺や毘盧峰などには登るべくもないと思つた。栗鼠がチョロチョロとからかひでもするやうに私達の前を掠めて行つたりした。私は休んではのぼり、のぼつては休んだ。普德窟の建物がはつきりと眼に入つた時には、先に行つたボーイ達は既にそこに到達して面白さうにあたりを見渡してゐた。

やつと私はそこに達した。私は日光の外山の行者堂を思ひ出した。矢張、そこには金剛山の若い坊さん達の行をする場所で、その一人二人が頻りに坐禪をやつたり讀經をしたりしてゐた。私は遠く離れた別天地にでも來たやうな氣がした。時代や文化を超越して、かういふ山の中で日を

送つたら、それとそのんきで好いだらうと思つた。そこに行に來てゐる坊さん達は、日光あたりと同じやうに、手一合と言つて、矢張蕎麥粉か何かを持つて來て、それ　水で解いて食つて、その行のある期間を過してゐるらしかつた。私は内地には既に亡びつゝある佛教の舊い慣習の未だに此處に殘つてゐるのをなつかしまずにはゐられなかつた。私は塵一つない窟内の緣側に腰をかけて、靜かな落附いた心持であたりを眺めた。

そこから見た溪谷は、何とも言はれず美しかつた。五つも六つも連つて湛へられてある潭は、それは何のことはない、大きな藍甕を並べたやうで、或は高く崖に添ひ、或は大きく岩に凭り、或は深く岸に埋もれたやうになつて見えた。

『何うだえ！あの潭は〃何とも言はれないぢやないか？』私達はかう言つて指さし合つた。

一一

この普德窟の眺めを大きくしたのが望軍臺で、更にまたそれを廣くしたのが毘盧峰であるといふことであつたが、私は不幸にしてその孰れにものぼつて見ることが出來なかつた。それを實行するには私の體は餘りに肥り過ぎてゐた。

望軍臺から見た内金剛の連峯、毘盧峰から眺めた日本海の光景は何とも言へない壯觀であるといふことであつた。そこからは、雲霧の中に尖つた峰の浮かんでゐるさまも、山脈の遠く連らなつてゐるさまも、山の盡きた向うに平野の靄きわたつてゐるさまも、微に白く海光の輝いてゐるさまも、何も彼も一眸のもとに見えるといふことであるのに、惜しいことには私はそこまでのぼることが出來なかつた。私は普德窟あたりで滿足しなければならなかつた。

内山眞珠潭

私は法起菩薩の姿に似てゐるといふ岩石を其處に仰いだ。否、そればかりではなかつた。種々の菩薩に似た岩石がそこにも此處にもあつた。あれは普賢菩薩、その向うにあるのが文殊菩薩、此方にあるのが彌勒菩薩などとそこ

たゐた僧は説明した。

一時間ほどして、私達は別な路を取つて下りた。潭が潭に續いてあらはれ出して來た。つまり上から見下した潭を今度は一つ一つそれに添つてのぼつて行かなければならないのであつた。私達は石から石へとわたつて行つた。

内山八潭の名があつたが、小さいのを取立てゝ數へると、十も十五もそれからそれへと連なつてゐるのを私は目にした。大きいのには、眞珠潭などといふ非常に立派なものがあつたが、小さい方にも、美しい深い藍色をした無名の潭が到るところに展げられてあつた。石の罅隙を何處からともなくくゞつて來て、靜かに丸く湛へられてゐる水は、ちよつと形容するに辭がないほどそれほど美しく且つ見事であつた。

『もう晝だね？此處で辨當をやらうぢやないか？』眞珠潭の一枚岩の上に來た時には、皆なはかう言つて、申し合せたやうに腰を下して、そこに持つて來た包を開いた。

ふと私の胸には日光の裏見瀑の上流にある慈覩の瀑の一枚岩がそれとなしに浮んで來た。其處は此處よりは陰氣だ。それに、水もこれほど綺麗ではない。しかしその感じ——辨當でも持つて

行つて、半日遊んで來るのに適してゐるといふやうな感じは、兩方ともよく似てゐると私は思つた。私達は食つたあとの折箱をそこに流したりしなどして遊んだ。

腹の赤い青蛙——それは金剛山だけにゐるものらしいが、後には皆なは、水溜りの中から何疋も何疋もそれをステツキでつゝき出して、潭の中に投げ入れることを面白がつた。流された蛙は水の瀬が強いので、泳がうとしても泳げずに、赤い腹を上にしたまま、一枚岩の上を潭から潭へと流されて落ちて行くのであつたが、その形が面白いと言つて、それからそれへと蛙は捜し出されて、際限なしに潭の中へと投り込まれた。『ちよと待ちたまへ、おもしろい蛙だね？』かう言つてM君はそれを寫生するためにポケツトから帖を取り出した。

私達は少くともそこで一時間近く遊んだ。次第に蛙を流すことにも倦んで、後には大きな石を近所から捜し出して來て、之れを深い潭に押し落すことに骨を折つたりなどした。一番大きな石が落ちて凄じい音と共に飛沫が高く揚がつた時には、皆なは子供のやうに拍手喝采した。

一二

これから溯ると船潭、龜潭、火龍潭などといふのがあつたが、孰れも美しい倭繪のやうな感じ

のする潭であつたが、しかも繪卷としては、何と言つても前の眞珠潭にその中心を置かなければならなかつた。

次第に溪谷は狹く狹くなつて行つた。ところに由つては、そのまゝ行きどまりになつて了ひはせぬかと思はれるくらゐであつた。私達は岩石にかけた階子のやうなところを何遍となく上つたり下りたりして進んで行つた。

潭が盡きると、今度は潺湲とした溪流があらはれ出して、それに日影が美しく碎けた。いつとはなしに、溪谷は西から北へと大きく曲つて行つてゐるのであつた。深い杉の森が暫しの間續いた。

金剛山だけにあるといふ釣鐘の形をした焦茶色の花だの、朴の花に似てそれともいくらか違つてゐる瓣だけ赤い白い花だの、赤い色をあたりに際立たせて爛漫として咲いてゐる躑躅の一種だのが到るところにあらはれ出して來た。『この花は何と言ふ花だらうね？えゝ』かうM君は何遍となく訊いた。

潭の盡きたところから、摩訶衍の寺のあるところまではさう大して遠いとは思はれなかつた。

杉の森の中を抜けて、更に疎らな、たまには白樺などの雜つてゐる林を抜けると、鮮人の樵夫が二三人で木を伐つてゐたりなどして、やがて少し開けた小高いところに、その朝鮮風の寺の屋根を私達は發見した。

此處は長安寺や表訓寺などに比べて、ぐつと大きな格式の好い寺であるといふことが私達にも一目でわかつた。そこには大勢僧侶がゐた。わざ〳〵遠くから集まつて來たらしい僧達もゐた。傍の廣場に榻を据ゑて、のんきさうにそこで話してゐる人達をも見かけた。

いかにも世を離れてゐる形が私の心を靜かにした。かういふところに一夏を過したら、それこそ何んなに好いだらうとも思はれた。樹の多い山巒がその周圍を取卷いてゐるために、そのためにあたりの空氣も、しつとりと、影の多い、濃やかなものになつてゐた。

『華嚴の講義が始まつてゐるんですとさ！』

かう誰かが言つたので、それに惹かれたといふやうにして、私はそのまゝ寺の中庭の方へと入つて行つて見た。成ほどそこには大勢僧が袈裟を着け珠數を持つて端然として坐つてゐた。朝鮮語であるから、何を言つてゐるのか少しもわからなかつたけれども、しかも冴えた、量のある聲が

一種の感激を具して、絶えずそこから洩れてきこえて來てゐるのを耳にした。

此方に來てから、M君に、

『それでも感心だね。日本の所謂本山などよりも餘程眞面目だね？あゝやつて華嚴なんかやつてゐるのは面白い！』

『朝鮮でも、金剛山は唯一の靈地にしてあるんださうですからね。坊主にもえらいのがゐるさですよ』

『兎に角、あゝやつて華嚴なんかやつてゐるのは頼もしい！辭がわかれば、傍聽するんだがな……』

さう言つたところでしかし何うにもならなつかた。やがて私は清水の湧き出してゐる方へと行つた。私は日光の本坊などを思ひ出さずにはゐられなかつた。そこには綺麗な泉が滾々として日に光つて湧き出してゐて、その中にいかにも冷たさうに豆腐や芽出し豆が浸けられてあるのを見た。

一三

この寺の上の方には、萬灰庵だの、白雲臺だの、まだいろいろな名勝が澤山あつたけれども、大して心を惹かなかつたので、そこで引返すことにしてゐると、案内のボウイが、それでは餘りに飽氣ないと言つて、無理に私達を妙吉祥まで伴れて行つた。

この路は内霧在嶺と言つて、金剛山での一番の奥の院である檢岾寺へと行くやうになつてゐるのであつたが——實はそこまで行つて見なければ本當ではないのであつたが、其方へ出て了ふと溫井嶺の方へ出て行くことが出來なくなる上に、萬物相の方にも非常に廻り道になるやうな形になるので、遺憾ながら、私達はそつちの方は斷念して、妙吉祥から引戻して來ることにした。

人の話では、この峠はさう大したものではないといふことであつた。深い林が續いてゐるだけで、溪流と云つても、さう大して美しいものはないし、眺望でも毘盧峰にでものぼるなら別だが、さうでなければ、檢岾寺までは、殆ど見るやうなものもないといふことであつた。唯、その寺が本坊であるだけに、堂も立派だし、僧侶も多いし、それに例の五十三佛などもあつて、訪ねれば訪ねただけの價値はあるにはあつたのだが、それには同じ路を戻つて來なければならない上に、寺に泊れば、朝鮮料理を食はなければならないし、運がわるいと南京蟲に攻められないとも限ら

内院禰鮎寺

ないので、『まア、今度は止さう！』と言つて私達はそこから引返した。

しかしその密林の中は、かなりに深い山で、日本アルプスの槍ヶ嶽に行く途中や、日光の裏山の湯西川から土呂部に越えるあたりに似てゐるといふことであつた。それに、のぼりもさう大して長くなく、妙吉祥から四仙橋まで十町、それから峠まで廿七八町、あとはすつかり下りになつてゐるといふことであつた。毘盧峰へは、四仙橋から左に折れてのぼつて行つた。しかしそれはかなりに遠く、尠くとも三十町近くある上に、ところに由つては、岩石に縋つてのぼらなければならない嶮しい嶮しいところがあるといふ話だつた。しかしそこにのぼれば金剛の萬二千峰は、全く手に取るやうに指點されるばかり

か、遙に日本海の浩蕩とした波濤をも一眸のもとに收めることが出來るといふことであつた。しかも肥つた體の持主である私は、遺憾ながらその眺望を恣にすることが出來なかつた。私達は止むなくそこから元の路を長安寺の方へと戻つて來た。

途中、私とM君との話したところでは、これだけなら、金剛山もさう大してすぐれてはゐないといふことになつた。それは一般の說では、內金剛よりも外金剛の方が好いと言はれてゐるから玉流溪と萬物相とを見ない中は、何とも言ふことは出來ないけれども、何うもこの種類の溪谷なら、それほど大騷ぎをすることはないのではないか。第一、洋畫にはならないとM君は言つた。それに深山の氣分に乏しく、とても日本アルプスに見るやうなあゝした幽邃な感じを求めることは出來ないといふ點に於て私達は一致した。

私達は歸りに表訓寺で藤蔓のステツキを買つたり、岩茸取りの爺を寫生したり、尼寺を訪ねたり、路に丸くなつてゐるまむしに危く飛びつかれようとしたりしたが、それでも無事に最初の一日を過したことを祝した。

ホテルに歸つてきた時には、私達はかなりに疲れてゐた。私達は途中で折つて來た朴に似た白

い花をホテルの大きな花瓶に挿した。

一四

内金剛から外金剛へと行く路は、さきに言つた毘盧峰から九龍淵へ下りるものと、摩訶衍から内霧在嶺を經て楡岾寺に行くものと、それからもう一つ蓮田から三聖庵を經て神溪川の溪谷に出て行くものと、この三つが概して深い山の中で、林も深く、嵐氣も饒く、まだ世に知れない瀑布などもあつて、たまには人の目を駭かすやうな奇景もあるといふことであつたが、旅客は大抵その三つの路は通らずに、細洞から新豐里へと出て、溫井嶺を越して、そのまゝずつと萬物相の方へと出て行くのを普通としてゐた。

あくる日は雨かと思はれたが、それでも曉近く空の具合が段々好くなつて、頼んで置いた自動車の支度が出來た頃には、碧い空が聰しげにところどころにあらはれて、明かるい日影さへ山の向うにそれと指さゝれるやうになつた。

『好い鹽梅だ！』などと言ひながら、私達は二夜世話になつたホテルの人達に暇を告げて此方へと出て來た。

『新豐里まで向うから案内者が來てゐるんですね？』

『さうです。昨夜おそく溫井里から電報がありましたから、きつと參つてゐます。それに、あそこまで此方からボウイを一人つけて上げますから』ホテルのマネイジヤアは親切にかう言つてそこまで出て見送つて呉れた。

『それぢや御機嫌よう。今日はきつとまた新しいお客が來ますよ』

こんなことを言つて私達は自動車へと乘つた。

またいつ逢はれるか知れないやうな人達であつたけれども——否暫く經つた後には、全く忘れて了ふやうな人達であつたかも知れなかつたけれども、しかも別離の辛さを私達は感ぜずにはられなかつた。否、これに限らず、さういふ風にしていろ〳〵な人達と別れて來たことを私は思ひ出した。その中には美しい娘も、女中も、ボウイも、マネイジヤアも、澤山に澤山にあつて、時にはもう二三日滯在してゐたら何んなに離れ難くなるであらうと思はれるやうな人達もあつたが、さういふものにも慌たゞしく別れて了つたことを思ひ出した。と、鐵嶺の旅舍の若い細君だの、安東ホテルの女學生風の若い主婦だの、たしかお玉さんとか言つた怜悧な美しい女中だのが

走馬燈のやうに逸早く私の眼の前を掠めて通つた。

氣が附くと、自動車はもうずつと此方の方へと來てゐた。遠い山からは、鼠色をした雲が漲々と湧き上つて、それが蠟燭の形をした大きな峯へと懸つて行つた。末輝里から先は、川に添つた路が壊れてゐたりして、ところに由つては路もない草原のやうなところを遮二無二突破したりなどしたが、しかもあたりのさまは、私達を樂しませずには置かなかつた。私達は大きな山脈と山脈との中に挾まれた高原のやうな感じのするところを通つて行つた。內金剛の連峰を右に、左には午前の日影の麗かにさし添つてゐる低い山巒を見つゝ私達は進んだ。子規が頻りに爽かな聲を立てゝ啼いた。

かと思ふと、雲が何處からともなく湧き出して、あたりが急に佗しく暗くなつたりした。『雲行きがちと變ぢやないですな？、荒れ模樣になつて來たんではないかしら？』かう私は私の隣に腰をかけてゐるボウイに言つた。

『大丈夫ですよ……此方は滅多に雨は降りませんから』實際、山の中にゐては本當の天氣はわからなかつた。雲は時の間に晴れて行つた。碧い空と日影とがまたあたりを明るくした。

一五

細洞から新豐に行くと、山巒は段々深くなつて、いかにも山の中といふ氣がし出して來た。嵐氣が靑くあたりを染めて、その淡いところに日影が金色に輝いてゐるのが何とも言へずに美しい。山と山との重なり合つた間からは霧が白く何物にか裁斷されたやうに絕えず此方へと靡きわたつて來てゐた。何うしても天候が變りかけてゐるとしか思はれなかつた。

やがて新豐里へとやつて來たが、そこには一二軒朝鮮民屋があるばかりで、休憩するやうなところも何もなかつた。勿論溫井里からの案內者もまだやつて來てはゐなかつた。『さうでせうな、向うから此處まで來るには、何うしたつて、四時間ばかりかゝりませうからな。今朝五時に發つて來たにしても、まだ來ないわけですな』私達について來た長安寺のボウイはこんなことを言つて、爲方がないといふやうに、自動車を捨てゝ私達の先に立つて歩いた。

『もう好う御座んすよ。地圖があるから迷ふやうなことはありませんから……』

『でも……』

『だつて向うからすぐ來れば好いですけども、何處まで行つて行き逢ふかわかりませんもの……』

『大丈夫ですよ。もう、ぢき向うから來ますよ。長いことはありませんよ。緩くり行きませう……』

向うから來る案内者に私達を渡さない中は、その自分の責任が濟まないといふやうに、ボウイはさつさと私達の先に立つて歩いて行つた。それは水は少いけれども深く穿たれた谷に添つて、幾重にも折れ曲つて、その折れ曲る度に次第に山の両方から迫つて來るやうな感じのするところであつた。重なり合つた山の奥には、蓬々とした雲霧が墨を潑したやうに黑く凄じく漲りわたつてゐるのを私達は見た。

しかし、さうして歩いて行つたのも、さう長い間ではなかつた。路に添つて、材木などが積まれてあつて、礎らしいものはまだ打込んではなかつたけれども、新に家屋でも建てる計畫をしてゐるやうなところへと私達は來懸つた時、ボウイはその材木の上に腰かけて休んでゐる丈の低い何方かと言へば老年に近い一人の男の方へ近寄つて行つた。

『君は溫井里のホテルから來てゐるんぢやありませんか？』

『さうです……』

かう言つてその男は急に立上つた。

果してそれは向うから私達を迎へに來てゐるものであつた。かれはその新たに休憩所を拵へるところで——材木の積んであるところで待つてゐれば間違ひはないと言はれて來たので、既に一時間ほど前にそこに到着してゐたに拘らず、そこにじつとして待つてゐたといふことであつた。

『天氣は何うでした？外金剛は雨ぢやなかつたですか？』かう私は訊いた。

『さうです、今朝は雨でした。これぢや何うも天氣がむづかしいと思つたが、峠を越して此方へ來たら、すつかり霧が晴れて、天氣になりました！』

『それぢや外金剛はまだ雨かも知れないね？』

『いや、大丈夫でせう、晴れたでせう！』かうその男はあたりを見廻すやうにして云つた。

私達はそこで長安寺から送つて來てくれたボウイに別れを告げた。で一歩々々私達の距離は遠くなつて行つた。溪谷に添つた路は幾度となく曲つて、後にはその小さい姿も全く見えなくなつて了つた。

一六

渓谷に添つた路は、次第に私達を峠の方へと伴れて行つた。ところに由つては、水の碧く湛えられてある潭の傍に小さな瀑が落ちてゐたり、崖についたやうなところを何遍となく折れ曲つたり、時にはまた石ころの足を噛むやうな歩き憎い路を喘ぎ喘ぎのぼつて行つたりした。小さな朝鮮民家がさびしく一軒崖のかげに立つてゐたりした。

『内地の山の中と少しも違はんね？』

『本當ですね……。樹などもいろいろな木がありますね……。』

こんなことをM君と話しながら私は歩いて行つた。私達の前には私達の鞄や繪具を入れた箱や蝙蝠傘などを紐で結ひ附けて、前と後に垂れ下らせた案内者が、老年にも似合はず、達者に且つ足早に歩いてゐたが、『中々達者だね？もういくつだね？』かう私が後から聲をかけると、『いや、もう駄目ですけんな……。年ももうとつてゐますけん……？』

『でも、まだそんなぢやないんだらう？』

『もう六十ですけん、何うもなりませんな。もう少し若い中には、元氣でしたけんな』

『六十？それぢやもう僕より餘程上だ。それにしちや達者だね？今朝、向うからやつて來たんだ

からな……』

『駄目ですけんな、もう……。それは、此の路は歩きつけてゐるけん、そんなに苦には思はんけども、外ではもう歩けやしないですけんな……』

頻りに九州訛が出るので私は一歩を進めて、『何處だね？君は？中てゝ見やうかね。熊本だらう？』

『いや、佐賀ですけん……』

『佐賀？ふむ、さうかな、何うもてつきり熊本だと思つたがな？』

『熊本にも長いことゐましたけんな』

その話に由ると、此方にわたつて來たのは、今から七年前で、その時は唯ちよと行つて見るぐらゐの考へで來たのだが、たうとう今までゐるやうになつたといふことであつた。今では金剛山の案内者としてかなりに人にも知られ、金にもなるらしかつた。

『人が皆な知つてゐて下さるけんな、有難いものですけん……』かうかれは落附いた調子で言つた。

『故郷に歸りたくはないかね？』
『歸りたくないこともないが、此方の方が樂ですけんな。そんたにあくせくしないでもゐられますけん……』
『さうかね……？』
こんなことを話しながら私達は歩いた。これから峠にかゝるといふところには、朝鮮民家が向うと此處に二軒あつて、何でも案内者の話では、それは何方も宿屋ださうだが、先きの一軒を外れたところに大きな岩が一つ立つてゐて、その根元から清水が滾々として湧き出して來てゐるのを私達は見た。私はそれを手で掬んで飲んだ。
氣が附いて見た時には、私達はもはや全く深い雲霧の中の人であつた。もはやそこでは、私達はその明るい日影をも聰しげな碧い空をも見ることが出來なかつた。否、すぐ向うに聳えてゐる山巒の根元近くまでも、霧はその鼠色の幕を深く垂らして來てゐた。山鳩が、ぽ、ぽと頻りに啼いた。私は案内者に訊いた。
『すつかり霧になつちやつたね？困つたね？これぢや、萬物相も何も見えなくなりやしないか

ね？』
『なアに、霧はかゝつて來ても、すぐ晴れますけんな……』かう言つて案内者はあたりを見廻すやうにした。

一七

曾て三井の重石鑛（タングステン）のあつたところだといふ跡を通つたりして、漸々峠に近くのぼつて行つた頃には、霧は細かい雨になつて、をりをり行逢ふ朝鮮人なども、あの例の小さな傘——被物の濡れるのだけを防ぐために出來てゐるやうだつた少さな三角な傘を頭の上にのせて、さもわびしさうに石から石へと傳はつて歩いて來るのを私達は見た。否、私達とて、蝙蝠傘や荷を持つて來てゐないので、新しい麥稈帽子も着物も何も濡れたまゝに任せなければならなかつた。
『本降りだね？これは！』
私達はかう言つて何邊となく互に顏を見合せた。最早案内者の言ふ言葉に信頼してはゐられないやうな氣がした。それに引かへて案内者は、『そんな筈はないんだがなア！』一體に雨の尠い朝鮮に雨期にもならない中から、そんなにひどい雨が降る筈がないのだがなア！と言つたやうな

調子で、『でも霧はいくら深く罩めても、すぐ晴れますけんな、萬物相まで行く中にはきつと晴れるけん……晴れさへすれば、すぐよい天氣になるでな、此方は……？』などと言つた。路は次第にのぼりになつて、歩きにくい石が到るところにあらはれ出した。それに、こゝでは林も最早松の木ばかりではなかつた。白樺も楢も楢もあつた。朝鮮の山とは思へぬほど樹が深く、霧が蓬々としてその間を縫つた。朴に似た白い花も到るところに咲いてゐた。

峠の上に來た時には、霧は愈々深くあたりを罩めて、最早何處を見渡しても、鼠色の外に何物をも見ることが出來なかつた。何といふ山巒が連つてゐるか、また何ういふ奇岩が欹つてゐるか山が深いか、淺いか、それすらもはつきりとわからなかつた。『これは駄目だね。これぢや、萬物相に行つたつて、とても何も見えやしないね？』早くも絶望したやうにM君は言つた。

『餘りわるロを言つたからだね？』

『いや、それよりも、山が見られるのを恐れて、それで霧で包んで了つたのかも知れないよ』

『さうかも知れないぞ……。何うも萬物相は、何方かと言へば、こけおどしだつていふ話だからね。現に、S氏の紀行文などにも態々のぼつて行く價値はないやうに書いてあるからね？却つて

霧で見えない方が山のためには好いのかも知れない……』

『さう思つてゐれば間違ひはないですね』

こんな風に私達は笑つて話し合つたけれども、しかもそれは負惜しみで、本心では一刻も早く霧の晴れることを願はずにはゐられなかつた。此處まで來て、萬物相の奇巖の髣髴をさへ見ることの出來ないのは、私達にしてもいかにも殘念であつた。

峠からは路はひた下りになつた。處に由つては、殆ど足を留めることも出來ないやうな急勾配のところもあれば、尖つた石が草鞋を嚙んで、飛び上るやうな痛い目に逢はされるやうなところもあつた。深い林は深い林に續いた。何處まで行つても一間先は見えないほどに霧は厚い壁を展げた。『何うも晴れんなア！こんなことは本當に滅多にありはせんけんなア！』後には案内者もかう絶望的に言つた。

たうとう霧は少しも晴れずに――晴れる希望も少しもなしに、私達は萬物相の方へと入つて行くわかれ道のところへとやつて來て了つた。そこには標示杭が立てられてあつて、これから裏萬物相まで二十町といふことが書かれてあつたが、そこに來ると、私達はぴたりと立留つて了つた。

『何うするね？この霧ぢやわざわざ行つたところで、何にも見えやしないが――』かう言つて私達は顔を見合せた。

一八

霧雨が細かく降つてゐて、いつまで其處で待つてゐても、とても急に晴れさうには思はれなかつた。

『何うしますね？』

『折角來たんだから、此ま〻素通りして了ふのも殘念だけれど、これぢや行つて見たところで、何にも見えやしないね？』

『それはさうな……。これぢや見えんけんな……？』案内者も氣の毒だといふやうに私達の顔を見て、『何うじやな、この下のところに休む家があるけんな。そこで少し休んで居ては何うな？そんなに長いこと霧が晴れんことは滅多にないけん？』

『風があれば好いんだがな。さうすればすぐ晴れるんだが？』

『さうぢやな……風があれば好いんぢやな……。さうすれば、ぢきあがるけんなア……』

雨の中に立つてゐてもしやうがないので、そのま〻私達は下の休憩店に行つて待つことにしたそれは案内者の言つた通り大して遠くはなかつた。二町ほど下りたと思ふと、霧の中からその朝鮮民屋がぼんやりとあらはれ出した。

何でも萬物亭とか言つて、萬物相を見に行く人達の行き歸りに休憩するところで、洋畫家の丸山晩霞氏などは、その一室に數日起臥して絶えず寫生に出かけて行つたといふことであつた。外は霧雨が降つて、着物がぬれるといふほどではなかつたけれども、何となく濕つぽく佗しいので私達もその小ぢんまりした朝鮮民家の一家へと入つて行つた。

『大きな岩が見える！』

それまで外にゐて何か寫生してゐたM君が突如にかう言つたので、私は慌てゝそこにあつた草履を突かけて戸外へと出て行つた。見ると成ほどそこに、霧のいくらか薄くなつた間から、大きな筍のやうな巖石の屹として立つてゐるのがぼんやりと微に指されて見えた。

『ほ！』私はかう思はず聲を立てた。

『あれが三仙岩のひとつですけんな！』其處に出て來た案内者はそれを仰ぎつ〻かう説明した。

『ふん、あれが三仙岩かえ？……萬物相はあれの先かね？』
『舊萬物相は、あの岩のすぐ傍ですけん……わけはありませんけんなア……』
『裏萬物相は？』
『そこは舊萬物相から十五六町ほどものぼりになつてゐますけんな……』
時の間に雲霧は早く早く襲つて來て、その微なぼんやりした岩の姿すらいつか全く見えなくなつて了つた。
爲方がないので、私達は再びその一室へと戻つて來た。曾て丸山君が其處にゐたと思ふと、何となくなつかしい氣がしてあたりを見廻した。それは朝鮮民家には稀に見るといふやうな清らかな一室で、敷きつめたアンペラも新しい上に、壁には丸山君の意匠した金剛山の鳥瞰圖などもかけてあつて、その向うに、ちよつとした色の白い若い鮮人の細君が頻りに姑らしい老年の主婦と話しをしながら坐つてゐるのを私は見た。此方に、少しでも言葉がわかつたなら、同じく長い間相對して坐つてゐるにしても、彼一句、此一語、多少は徒然を慰めることが出來たであらうに――否、場合に由つては、旅の話の一つになるやうな光景も描かれたであらうに、嗚の悲しさには

後にはその細君が私達の傍にやつて來て何か頻りに言ひかけても、それにも何一つ答へることが出來なかつた。

一九

そこで一時間以上も私達は待つたけれども、しかも霧は晴れようともしなかつた。あたりの模様は益わるくなつて行くばかりであつた。『何うする？』私達はまたかう言つて互に顏を見合せた。
『しかし、折角、こゝまで來たんだ……。舊萬物相にすら行かずに素通りするのもあまりに殘念だ。見えても見えなくつても、そこまでは行つて見ようぢやないか？』
『さうだな。さうしよう……。そこに行つて見て、それから先のことは、そこできめることにしよう？』
で、それに一決して、私達はそのまゝさつき休憩したところへともどつて行くことにした。霧は益々深い。咫尺を辨ぜずと言ふのは、かういふのを指して言ふのであらうと思はれるくらゐである。岩石どころか、私達の入つて行く杜の中の徑さへはつきりとは見えないと言つたくらゐで

あつた。私達は石に縋つたり樹に凭つたりして、殆ど路といふ路もないやうなところを辛うじて進んで行つた。

やがて大きな溪谷があらはれ出して來て、石や岩が絶えず私達の前を遮つた。時に由つては、岩から岩に渉るために、幹だけ欲つてゐる大きな樹に兩手をかけて、猿のやうにのぼらなければならなかつた。私達は喘ぎ喘ぎのぼつて行つた。

尠くとも、そのわかれ道のところから七八町はのぼつたと私は思つた。突然、私の前に凄じく大きな角柱のやうなものがあらはれた。怪物！　恐ろしい怪物！　頭の上から眞正面に落ちて來るかと思はれた怪物！　それは他ではなかつた。三仙岩の一つである大き巖石であつた。

『ほ！』

私達はかう言つて思はずそこに立留まつた。

矢張り、妙義を大きくしたやうなものだなといふ感じが、その瞬間に私の胸に浮んで來た。私は金洞の第二石門あたりの霧を思ひ思した。私達は案内者のあとについて、その大きな巖石の根元についてゐる路をぐるりと廻るやうにしてのぼつて行つた。

舊萬物相は最早やそこから一二町しかなかつた。それはその三仙岩の並んで立つてゐる眞中にあるやうなところで、例の來遊した朝鮮人の姓名がそこら一杯に岩石に彫られてあるのを私達は見た。何でもそこからでも、奥深く連つてゐる岩石の起伏や山巒の連亘が、かなりに見事に展開されて見えるといふことであつたけれども、しかも私達は竟に何等の髣髴をも指點することが出來なかつた。唯、蓬々とした霧が、その岩に當つて碎けて落ちて行くのを見るだけであつた。

『矢張り、餘りわるロを言つた罰だね。流石は靈山だよ』

爲方がないので、私達はまたこんなことを言つて笑つた。

『これが忽ちに晴れれば面白いんだがなア？　さうすれば却つて一層山が光彩を添へることになるんだがなア？』こんなことをも言つて見た。しかも何ういにもならなかつた。霧は益々深くなるばかりだつた。

私達は三十分ほど、さうしてそこに立つてゐたが、たうとう奥萬物相は斷念して、そのまゝ溫井里の方へと下つて行くことにした。

私達は深い谷を傳つて下りた。

私達の絶えず添つて下つてゐる大きな溪谷は、寒霞溪と言つて、内金剛の萬瀑洞や外金剛の玉流溪と同じ種類のものであつたが、谷としてもかなり雄大な谷であつたが、惜しいことには、いかにしても水が少く、たまさかに湛えられてある潭も膚淺に、岩石の光澤も貧しく、をりをり立止まつて眺めても、大して私達の心を惹くには足りなかつた。私達は霧の間から時にはその尾を、その頭を、その胸をあらはして見せてゐる觀音連峰に面しつゝ靜かに石ころ道を下へ下へと下りて行つた。

しかしこの溪谷も、溫井里から此方に向つて入つて來る人達に取つては、かなりにめづらしく且つ大きなものであるに相違なかつた。尠くともこの溪谷は、文珠峯や萬物相がその背景を成してゐた。從つて雲烟の起伏も端倪すべからざるものがあるに相違なかつた。この奥には何んなにすぐれた奇勝が藏されてあるか知れないといふやうな氣を起させるに相違なかつた。私達は不幸にして反對に内金剛の方からやつて來た。私達は深い山の中から來て、次第に海岸平野に出て行くやうな行程を取つてゐた。『さうだね？そのせいもあるね？矢張山水を見るにも、順序をよく考

萬物相

へて見ないといけないね？』私達は歩きながらこんなことを話し合つた。

そこから溫井里までの間には、葛田、三街里などゝいふ小さな村があつて、路は絶えずその溪谷に添つて行つてゐたが、一度わたつた溪流を更にもう一度わたり返すと、今度は急に前面が開けて、右には水晶峯を、左には觀音峯を仰ぎつゝ、その向ふに、白いペンキ塗りの人家のごたごたと連りわたつてゐるのを見るやうにそつて行つた。

『あれが溫井里ですけんな！もうぢきですけん……』かう案内者は指さしつゝ言つた。

時計はそれでももう四時を過ぎてゐた。萬物亭で晝飯を食つてから、あそこで待つてゐた間時のかなり長かつ

たのがこれでも知れた。霧の中を頻りに子規と山鳩とが啼いた。次第に私達は抗谷を離れて、濶々とした高原の方へと歩いて行つた。最早そこでは突兀とした巖石もなければ、狹い窮屈な感じのする懸崖もなかつた。霧の間から見た眼界も濶く濶くなつて行つた。私は輕井澤にでも來たやうな氣がした。

尠くともそこには溫泉が私達を待つてゐる。ホテルの靜かな一室が私達を待つてゐる。否、そこにゐる人達も今か今かと私達の來るのを待つてゐるに相違ないのである。

かう思ふと、その靜かな村落が急になつかしくなつて來た。私達は足を早めた。

そこは長安寺とは丸で正反對と言つて好かつた。第一、あたりの濶々としてゐるのが私達を落附かせた。次に、海に近いらしい感じが私達をのんきにした。そこには新鮮な魚類も野菜も澤山に澤山にあるに相違なかつた。私達は故郷にでも歸つて行くやうな心持で次第にそつちへと近寄つて行つた。

やがてさびしい村が私達の前に展げられて來た。新しく建てられた旅舍らしい二階屋、不規則にそこに一軒かしこに一軒と言ふやうに建てられてある內地人の住宅、葱だの玉菜だの作られて

ある畑、水密桃と林檎との栽ゑられてある果樹園、それに添つて右に折れて少し行くと、いかにも山のホテルらしい、二階建ではあるが、間數としてはいくつもないであらうと思はれるやうなペンキ塗の家屋が山寄にぽつんと一つさびしげに立つてゐるのを私達は見た。霧がまた蓬々としてあたりを籠めた。

二

世には公にされなかつたけれども、曾てN・F女史の書いた小說に、この溫井里のことが細かく寫生されてあつたので——そのヒロインが戀の重荷を抱いて、死ぬつもりで元山から遙々と自動車で此處にやつて來て、さて此處で心機一轉して、死ぬのを思ひ留まるといふことが、いかにも細かく、且つ目に見えるやうに巧に寫生してあつたので、初めてやつて來た土地でありながら以前にも度々やつて來たところのやうな一種のなつかしさを私に誘つた。

『ははア、これがそのホテルかな?』かう私は自分に繰返した。と、それにつゞいて、N・Fが夕方にひとりさびしくそこにやつて來たことや、薄暮の空氣がさびしくあたりを罩めてゐたさまや、ホテルの下階の日本間の六疊に特に賴んで入れて貰つたことや、死に面して——全く死に面

して、勇ましくそれに向つて飛込んで行かうとする心と、何うかして出來るものならそれを回避しようとする心とが一緒になつてすさまじく火花を散らしたさまや、その時のこのホテルのマネイジャアが、かねて京城の朝鮮ホテルでよく知つてゐる間柄なので、さうした絶望と重荷とをかの女が抱いてやつて來たなどとは夢にも知らずに、チヤホヤと頻りに親切に世話して呉れたことなどが、はつきりと私の胸に浮び出して來た。

私達は二階の一室に少し落附いてから、湯に入るためにボウイに案内して貰つて、町の通りの方へと出かけて行つた。ホテルにはまだ溫泉は來てゐないのであつた。私達は新しく出來た大きな旅舍の傍を通つて昔からあつたといふ朝鮮人の穴藏のやうな湯を覗いて、それからそれに隣つてゐる矢張り内地人の經營してゐる旅舍の浴槽へと伴れられて行かなければならなかつた。幸に新しく出來た湯は綺麗であつた。私達は好い心持でそれに浸つた。三十分ほどした後には、私達は、湯上りの身を涼しい山風に吹かせながら、いかにも高原らしい、雲霧の押寄せたり晴れたりする廣い道をそのまゝホテルの方へと戻つて來た。

軈てぬれ手拭をそこに置いて、入口のところの椅子に腰をかけると、そこに若いハイカラなマ

ネイジャアが人なつかしさうに寄つて來た。

私の好奇心は何うしてもその話に觸れずにはゐられなかつた。

私は訊いた。

『あなたは、N・Fッていふ女の方を知つてゐませんか？』

『存じてをります……よく存じてゐます……』マネイジャアは私の顏を見るやうにして、『一昨年でしたか、此處にもお出でになりました。たしかお二人づれだつたと思ひます？』

『そんなことはないでせう。ひとりでせう？』

『いや、女の方とお二人づれだつたと思ひますが？』

『その夏も、貴方は此處にお出でゞしたか？』

『え、まゐつてをりました』

私は滅多なことは言へないやうな氣がして、そのまゝ口を噤んで了つた。それにも拘らず、マネイジャアはそれからそれへと頻りに話した。何でもN・F女史の小説の中のラブ・アッフェアは京城でもその時分評判であつたらしく、現に女史は朝鮮ホテルあたりでもその相手と一緒に

よく食堂に行つたりなどしたといふことであつた。マネイジャアは後には宿帳を持ちだして、夫を丹念に繰つて『あ、さうです……。お伴れの女の方はあとから入らしつたんです……。始めはおひとりだつたんです……。あの年は生憎雨の多い年でしてね。歸れなくつて二三日のばしたりなすつて、お氣の毒でした――』かうマネイジャアは話した。

二二

『あの時、死なうと思つて此處にやつて來たんですよ』

『誰がです？』

マネイジャアは思ひもかけないといふやうに私の顏を見た。

私の話すのにつれて、次第にそれが飲み込めて行つたといふやうに、『はゝア、さうですか。そんなことちつとも存じませんでした。さうですか、それで、あのもう一人の女の方はあとからお出てでしたんですか？』京城である點までそのラブ・アッフェアを知つてゐるかれには、さうした經路がぢきそれと判つて行つたらしかつた。

『あゝいふ怜悧な方ですからそんなことはおくびにもお出しになりませんでしたし……、それに

あゝいふ美しい快活な方ですから……』

『さうでせうとも――』

『今では、しかし、ご仕合せでいらつしやるんでせう？』

『さうです……今では、そんなことはもう忘れてゐるでせう？今年もフランスへ行くと言つてゐましたから…』

それきり別に話は出なかつたけれども――また、讀者に取つては、さういふことは餘りに一私事に過ぎて、この旅行記には應しくないといふやうに思はれるに相違なかつたけれども、しかも私には、此處に來た以上、それを思ひ出さずにはゐられないほどそれほどその戀の苦しみが細かに、且つ巧に描かれてあつたのであつた。

私はそれからそれへといろ〳〵なことを考へた。戀といふものが時にはその人の生命を亡ぼすと共に、時には

温井里

何の苦もなしに、尋常茶飯事のやうに、または氷のやうにわけなく解けて行つて了ふことなどを繰返した。私はN・F女史がこの山の薄暮の空氣の中にじつと立盡してゐた時のことを思ひやられずにはゐられなかつた。また、その一方の相手の男が、その戀に破れて以來、丸で違つた人のやうになつて、事業をも人に讓つて、今はアメリカに行つてゐるといふことを思はずにはゐられなかつた。私は此處のホテルの繪はがきにそのことを書いて、東京のN・Fにあて〻出した。

そのためか、それともまたこのあたりの山の光景がさういふさびしさを旅客に誘ふやうに出來てゐるのか、それともまた二ヶ月の長い旅に懷鄕病がそろそろ頭を擡げ始めたのか、不思議にもそのほか私達はいろいろと國のことや妻のことや女のことを話し合つた。M君も、家族を東京の郊外に置いて來てゐるだけに、矢張りをりをりさうした懷鄕病に惱まされてゐるらしく、いかにも人なつかしさうに、靜かな低い聲で話した。『さうですね、さう言へば、それも性慾だと言へるでせうね？意識してラブなんかにしないにしても、無意識には何うだつたかわかりませんからね？』ある娘に非常にやさしくしてゐる話が出た時には、さういふ話をするのが、既にそつちに引つ張られてゐる證據だといふやうにM君は言つた。

『野郎ばかり寢てゐるのは、餘り好いもんぢやありませんね？何うです？二人寢のベットは徒に大きいと言ひたくなるぢやありませんか？』後にはこんなことを言つて私達は聲高く笑つた。外には夜霧が深く白く流れた。

二三

あくる日は朝早くから出かけた。今日こそは金剛山第一の勝と言はれてゐる玉流溪を探ることになつてゐるので、私達は何となく心が躍つた。

『八潭までは是非伴れて行つて上げなければいけないが！……』マネイジャアはかう命令するやうに案内者に言つた。

私達は急いで歩いた。霧は絶えず山から來て懸つた。何うも天氣は本式にわるくなつて行くらしかつた。『大丈夫かね？また昨日のやうに霧が深く籠つて、何にも見えないやうなことはありやしないかね？』

M君がかう訊くと、

『今日は大丈夫ですけん……。それに、昨日と違つて、谷ですけんな。かう遠く眺めると言ふの

ではないですけん？』
『でも、一寸先も見えないやうな霧がかゝりはしないかね？大分、空模様がわるいぢやないか？』
『大丈夫ですけん！……』
案内者はすたすたと先に立つて歩いて行つた。
草むらの中に萩だの釣鐘草だのが咲いてゐたりした。深い霧の中で、子規が頻りに啼いた。
極楽峴を越すと向ふにちよつと潤々したところがあつて、やがてそこに神溪寺の大きな伽藍があらはれ出して來た。矢張、長安寺と同じつくりではあつたが、その寺格はそれよりも數等上であるらしく、それに附屬してゐる庵寺などもそこゝに散在してゐるのを私達は見かけた。その前を通り越すと、また疎い松の林があらはれ出して、その右手に鰻を孵化してゐるところがあると言はれたけれども、そこは失敬して、次第に私達は奥深く入つて行つた。
山と山との間に大きな谷が開かれてゐるのは、それははつきりとしてわかつたけれども、その水聲を聞くまでには、その水脈を認めるまでは、否、その谷の岸近くまで入つて行くのには、猶松の林の中を拔けたり、大きな坂を踰えたりしなければならなかつた。幸に霧だけで雨は落ちて

來なかつた。
次第に溪谷のさまが私達にも飲み込めて來た。内山の萬瀑洞と比べて、此處はかなりに趣も形も感じも違つてゐるのを私達は見た。此處では山と山との間がさう迫つてはゐなかつた。また上から壓しつけられる樣な感じもなかつた。
神溪寺から二十町ほど行つたところで、私達は初めてその溪谷を此方から向うへとわたつた。そこでは私等はさう大して心を動かさなかつた。何方かと言へば、寒霞溪に似て、水もさう多いとは言へなかつた。私達は岩から岩へと飛んで渡つた。
『水が出て渡れなくなるやうなことがありますかな？これで？』
いくらか批評がましい調子で私が言ふと、
『ありますけん……。一昨年でしたな？陸軍の中將の一行を私が案内して來たけんな……其日は、來る時も雨模樣には雨模樣だつたが、そんなにえらい雨が降ると思はんけんな。大丈夫思うてやつて來たところが、歸りに金剛門のところが何うしても渡れないでな。一夜さ、そこに泊りましたけん……えらい恐ろしい谷ですばい……』かうその時を思ひ出すやうにして案内の男は言つ

た。

二四

『さうかな、こんな溪谷でも、そんなに水が出ることがあるのかな？』

『それはありますのけん……？水が出るとなると、一時間と言つてゐませんけんなア』

『それで何うしたね？その時？』

『私がな、無理に渡つて行けば行けないことがないけんな？行つて見ようと言ひましたけどな、途中まださういふところがいくらもあるで、果して向うまで行き得るか何うか、それがわからんけんな？それを言うとな、そんな無理をしてまで命がけで行かんでも好いけんッてな。それで、あの小さな小屋に五人ほど一晩ごろ寢しましたけんな……』

つまり溪をわたつて行く路が完全に出來てゐないので、雨の具合に由つては、何處から何う水が出て來るかわからず、從つて何處が何う渡れなくなるかわからないといふことであつた。次第に私達は溪谷深く入つて行つた。

神溪川と玉龍溪と相合したあたりまで溯つて行くと、最早あたりは全く山の中であつた。入つ

て來た仰步臺も最早あとになつて了つたし、兩岸の岩山も全くあたりを閉ぐやうにした。三度まで私はその溪谷を徒沙した。

『もう、此處は玉龍溪だね？』

樹木が多く、展望がきかず、何處で神溪川と玉龍溪とが一緒になつたかわからなかつたので、かう言つて私は案内者に訊いた。

案内者は右の方を指した。成ほどそこには、大きな谷がずつと遠く展けてゐるらしく、其方に行つて見ても、かなり世間に知られない奇勝があるらしく思はれた。しかし案内者の話では、その谷は大したことはないとのことであつた。そこに傳つて上つて行くと、新豐里の向うの細洞近くに出て行くことが出來るなどゝかれは話した。

成程、さうらしかつた。玉龍溪に入つて來るにつれて、あたりの溪山は忽ちその趣をあらためて來た。もはや兩山の間がさつきのやうにあゝいふ風に濶く展開されてはゐなかつたし、また水にしても、溪幅が狹くなつたために今迄のやうにわるく散漫に流れるやうな形を見せはしなかつた。水聲が凄しく高くあたりに反響した。

私達は林の中を通つては溪流の畔に出で、蟻崖の傍を攀ぢては更に新しい溪潭の淵へと下つて行つた。石は次第に大きくなつて行つた。中には半ば溪潭を茨でかくすやうなものすらあつた。それにしても、何といふ美しい碧い水の色だらう？また何といふ潺湲とした水の音樂だらう？時には琴を、時には佩環を、また時には金石を思はせるやうなその音樂！『かうなつて來ると、何とも言はれなくなるね？批評を絶するね？矢張、名山だね？』私は内金剛の萬瀑洞あたりで言つたことを再び此處に繰返さなければならなかつた。

溪は幾重にも曲つて行つた。そしてその曲る度毎に、新しい溪をいくつとなく開いて行つた。水は大きな一枚岩から壺の形をした潭の中に、淙然として落ちて行つたり、板を敷いたやうな扁平たい岩の上を縦横に幾筋にもなつて、サラサラと流れて行つたりした。岩のめづらしさと溪の美しさとには、私も心から動かされずにはゐられなかつた。

二五

内山よりも外山の方が好いといふ批評が次第に私にも點頭けて來た。大觀すれば、その岩山の形といひ、溪の多いさまといひ、西山の相仄した光景といひ、内外共に似てゐるといへ、その深

さに於てまたはその變化に富んでゐる形に於て、溪谷の屈曲してゐるさまに於て、玉流溪の方が萬瀑洞よりもぐつとすぐれてゐるのを見落すことが出來なかつた。

外山玉流洞

金剛門の茶店のあるあたりから一歩は一景を生じ、一溪は一溪を孕むといふありさまで、殆ど應接に遑がないと言つて差支なかつた。M君はその大きなヘルメット帽を此方に見せて、到るところで頻りに寫生の鉛筆を振つた。

それに、その茶店のあたりからは、岨道が一層嶮しくなつて行つた。時には大きな一枚岩に刻みつけてある鑿のあとを鏈に縋りながら一歩々々のぼつて行くやうなところもあつた。振返つて見ると、何うしてあは丸太の階子をのぼるやうなところもあれば、また時に

んなところをのぼつて來たか――のぼる時にはそれでも、のぼる一心で岩角をつかんだりしてのぼつて來たが、下りる時は何うするだらう？、一つ踏み外せば體も何も粉微塵に紛碎されて了ふであらうと思はれるやうなところが尠くとも一二箇所はあつた。

霧は谷から絶えず捲き上つてゐたけれども、しかもさう大して深くはならなかつた。昨日のやうに咫尺を辨ぜぬほどには罩めて來なかつた。それに、萬物相とは違つて、さう遠く眺めなければならないところもなかつた。

唯、惜しかつたことは、雄瀑、雌瀑にしても、また水が落ちてゐたらさぞ大觀を呈するであらうと思はれる飛鳳瀑にしても、崖が唯赤白く、瀑の瀉ぎ落ちた跡痕がそれと指さゝるゝばかりであることであつた。『渇水だけんな？この頃は？水の多い時には、それは見事だけん……こゝを通る時には、體がずぶ濡れになつて了ふけんなア……』飛鳳瀑の下を通つた時、案内者はこんなことを言つてその上を仰ぐやうにした。

玉流洞のあの瀟洒な谷、その見事な岩石、またあの眼もさめるばかりな碧い綺麗な水……そこはその瀑から岩角をひとつぐるりと廻つた樣なところにあつた、私達はその繪も及ばぬやうな美

しい溪谷を眼の前にして、此方の岸から向うの岸のあたり、更にその岸を縫つてゐる嶮しい崖道を傳つて、次第に下から上へとその谷を見て行つた。と、急に凄じく大きな絶壁が私達の行く手を塞ぐやうにした。

舟行如レ窮、忽又無レ際、それとは違つてはゐたけれども、しかもこんなところが何うして通れると思はれるやうな狹い溪谷が、岨道を傳つて行くまゝに何處からともなく開けて、連珠潭や玉流潭が繪卷か何ぞのやうに一つ一つあらはれ出して來るのであつた。のぼることもかなりにのぼつて來た。

急に、前に當つて、大きな谷が鰐の口か何かのやうに開けて見えた。いよいよ私達は來るところまで來たといふ氣がした。まだその全景は見ることは出來なかつたけれども、しかもそこには目を駭かすに足りるシインが展開されて來てゐるに相違ないといふ氣がした。大きな平な岩の上には、新しく建てたらしい茶店――瀑見茶屋が何のことはない、ぽかりと一つそこに持つて來て置かれた樣になつて見えてゐた。私達は急いで下りた。

二六

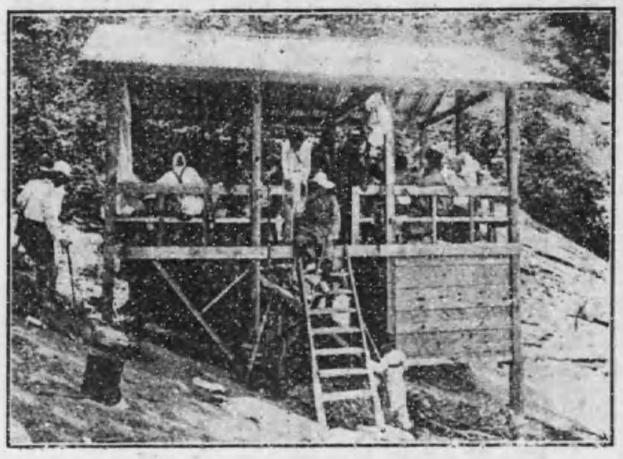
岩角に縋つたり鏈につかまつたりして下に下りて、大きな一枚岩――溪谷すべてがその岩で出來てゐるかと疑はれる一枚岩を向うに行くと、忽ち思ひがけない大きな瀑が、それこそ匹練と言つて好いか、銀河の中天から瀉ぎ下ると言つて好いかわからないやうな瀑が、何方かと言へば飴色に近い大きな、凄じく大きな絶壁の口から豁然として岩に添つて深潭へと落下してゐるのを私達は見た。

『ほ！これは！』

私は思はず立留つた。

それは瀑に對する不滿――金剛山には瀑も澤山あると聞いてゐたに拘らず、今まで一つとして瀑らしい瀑を見たことのない不滿、それを一擧にして償つて餘りあると言つたやうな立派なすぐれた瀑ではなかつたか。否、その瀑の懸つてゐる絶壁の色がやゝ淺露で、深みがなくつて、ともすれば殺風景に陷り易い恐れがないとは言へなかつたに拘らず、またその絶壁に朝鮮人が大きな字で姓名を彫つたり、南無彌勒佛と刻んだりして頗る雅致を損してゐるに拘はらず、それがあたりに影響しないほどそれほどすぐれた立派な瀑ではなかつた。しかもそこに達するには、私達

外山九龍淵



は、猶ほ一枚岩の上を潺湲として流れてゐる溪水を徒渉し、更に對岸の林の中を潜るやうにして歩き、再び尖つた岩角の多いところを傳はなければならなかつた。

やがて私達はそこに新たに建てられた茶店へとのぼつて行つた。茶店には誰もゐなかつたけれども――さつき金剛門の手前の茶店で休んでゐる時、そこにゐるわけになつてゐる朝鮮人が、今日は雨で、客なんかありやしない！と言つて下りて來て了つてゐたので、誰も人の影は見えなかつたけれども、都合が出來たらサイダの一罎ぐらゐは飲みたいと思つたその希望は達する事は出來なかつたけれども、しかもそこには新しい長い卓と腰掛とがあつて、冷めたい水さへ案内者に汲んで來て貰へば持つて來た壹飯の包を開くには別に不便を感じなかつた。

私達は暫くの間、すつかり引込まれたといふやうにして默つて瀑に對してゐた。

『何うです？この瀑は？』

突然M君が訊いた。

『さア、立派な瀑だね。内地にだつて、このくらゐの瀑は澤山にはないね。それはあの日光の華嚴には敵はないだらうけれども、ことに由ると、那智なんか鐘若としてこの下に落つと言つても好いかも知れないね』

『さうですかね？那智はまだ私は知りませんけども……。さうですね。華嚴よりはあたりが落ちてゐますね。それに雄大とか、壯大とかいふ意味に於て劣つてゐると言へば言へますね？』

『何方かと言へば那智式ですよ。あの絶壁の口から長い間岩壁を傳つて落ちて來るさまは、ちよつと似てゐますよ。それは何方かと言へば、此方の方が瀑の趣致に富んでゐますけれど――』

『さうですかね？兎に角好い瀑には好い瀑ですね。ちよつと言つて見れば、いかにも瀑らしい瀑と言つて好いと思ひますね？』

『本當だ……』

『私達はこんなことを言ひながらじつと瀑に對して立つてゐた。流石は外山第一の勝の名を辱めない九龍淵だと思つた。ふと私はその案内者の男が、私達のためにその瀑壺の瀑を汲むべく急いでそつちへと近寄つて行くのを眼にした。

二七

ホテルに歸つて來るや否、マネイジヤアは莞爾しながら言つた。

『何うでした？』

『非常に好う御座んした。矢張、内山よりも外山の方が好いですね。何しろ、あの瀑が立派ですね？』

『九龍瀑ですか？』

『あのくらゐの瀑は内地にだつツて、たんとはありはしませんからね？紀州の那智によく感じが似てゐますよ……』

『八潭はどうでした……』

『あそこも好いところですね……いかにも深い山の奥といふ氣がしますね。これで金剛山の輪郭

はすつかりわかつたやうな氣がしますよ……。ちよつとこれだけの山水を發見したとなつたら、隨分問題になるでせうね？』

しかし、內地の山と比べては、感じが丸で違つてゐることを思はないわけには行かなかつた。第一、內地の山のやうに感じが複雜してゐなかつた。特色といふものがひとつきりで——たとへば玉流洞とか九龍淵とか眞珠潭とかいふやうに、石と水と瀑との奇だけで、他に、大きな淵とか激湍とか、奔流とか、高原とか、山上の湖水とか、御花畑とか言ふものがなかつた。それに樹林にしても、日本アルプスの中に見るやうなあゝした密林は竟に發見することは出來なかつた。

『つまり、朝鮮の山水の特色は、潭と石と岩とにあるんだね。內地の熊野川とか、天龍とか、球磨川とか、富士川とかいふものを求めるのは求める方が間違つてゐるんだね』

『本當ですね』

私とM君とは後にはこんなことを話し合つた。

何うも天候が變だつた。矢張、昨日と同じやうに霧が近く軒先までやつて來て、ともすれば一間先も見えない位になつた。さうかと言つて、雨がさう大して强く降るでもなかつた。湯に入り

に行くにも別に私達は傘を要しなかつた。

子規の頻りに山際に啼くのを耳にし、水晶峰や、觀音峰に雲霧の往つたり來たりするのを眺めながら、廣い高原の道へと歩いて行く感じは何とも言はれなかつた。私達はのんびりした心持で——これでやつと金剛山も見て安心したといふ心持で、口笛などを吹きながら、町の角を右に曲つて行つた。そこには寫眞屋があつたり、蠅の恐ろしいのを鮮民に知らせる宣傳ビラの張つてある家があつたり、頑固な爺のゐる理髮店があつたり、これが料理屋かなア！昨夜おそく三味線の音が聞えて來たのはこれかなア！と思はれるやうな小さなあやしげな家があつたりした。幸に私達の入りに行く浴槽のある旅舍——ホテルに湯がないので、否、ホテルに湯がなくつては具合がわるいから、今年こそ掘るつもりでいくらか始めてゐたが、急に豫算がなくなつたので來年に延ばしたため、そのため、お客がみんな伴れて行かれるその旅舍の浴槽が、この春普請が出來上つたばかりなので、すべてが新しく、感じが好く、深く穿たれた底の底のやうな浴槽の中に、綺麗な透徹したアルカリ性の湯の中にぢつと靜かに體を沈めてゐると、連日の疲勞も、世間の煩はしさも、旅のつらさも、何も彼もすつかり忘れて了つたやうな氣がした。

二八

そのあくる日の午後には、私達はもはや再び自動車の中の人になつてゐた。私はホテルの人達に別れを惜まれたことを思ひ起した。さうした人達がいかにもさびしさうに、一方は旅から旅へと自由に動いて行つてゐるのに、一方はぴたりとそこに留まつて、この秋寒くなるまではいかにしても歸ることが出來ないのを歎くやうに、其處に立つてじつと此方を見送つてゐたことを思ひ起した。

長箭のあの美しい港――灣も廣く、汀線も長く、岬が右に長く突出して、帆が二つも三つもそこに浮んでゐるさまは、何とも言はれない感じを私に誘つたが、ことに、灣内深く人家の並んでゐるあたりは、海水浴に最も好いであらうと思はれるほどそれほど、沙明かに水清く、打寄せる浪は靜かに小さな畝を刻んで碎けてゐたが、さうしたシインが掻き消されたやうになくなつて了つたあとでは、さびしい道路と、さびしい村落と、をりをりそれを中斷して通つて行く田舍の町と、驚いて此方を見送つてゐる鮮人の子供達と、ところどころ橋が壞れて通れなくなつてゐるので爲方なしに川の中を無理押しに押し通つて行かなければならないやうな場所があるのと、段々

海金剛

路がわるく、凸凹が烈しく、時には體が飛び上るやうな衝動を受けるやうなところが多くなるのと、それより他には、久しく海の一瞥にも逢はずに、驀地に唯走りに走つて來たことを繰返した。

否、それればかりではなかつた。今日午前に、矢張自動車で、ホテルの人達に伴れられて三日浦から海金剛の方へと遊びに行つたことを思ひ起した。それは面白い半日だつた。三日浦は小さな潟湖であつたけれども、それでもその靜かな、しんとした光景は、私達の心を惹くに十分であつた。『此處等が別莊地になるくらゐ開ける時があると面白いな？』その眺望臺の一角に立つて私達はこんなことを言つた。月見草の黄いのが一面にあたりに咲いてゐたりした。高城といふ町から海岸の方へと出て行く

路は、坦々して髪のやうで、自動車は全速力を出して唯一氣に走つた。

私達は川の海に入るところに來て自動車を下りた。そして川をわたつて向うの立石里といふ漁村に入つて行つた。海金剛はそこから舟で廻つて見るのが本當であるさうだが、また舟から見なければ、本當の美は見られないといふことであつたが、生憎、その日は海がしけてゐて、とても舟が出せないので、爲方なしに、旅舍の主人に案内して貰つて、ずうつと山越しに出かけて行つて見たことを思ひ起した。私の見たところでは、海金剛はさう大してその美を誇ることは出來なかつた。あのくらゐの海は、内地にも到るところにあつた。東京の近くでも伊豆の南端あたりに行つたら、あれよりももつと面白い海が見られるであらうと私は思つた。M君はM君で、『男鹿半島の蒿雀窟あたりを見ては、とてもこゝなどは比べ者になりはしませんよ』などと言つた。然し燈臺の小さく白く向うに見えるあたりに行くと、いくらか面白いところが見え出して來て、怒濤の岩石に當つて碎けるさまと、海の深い碧をなして靡きわたつてゐるさまとは、私の目を惹くには足りたことを思ひ起した。

『霧雨が降つて來ましたね？何うも天氣が思はしくないな？』

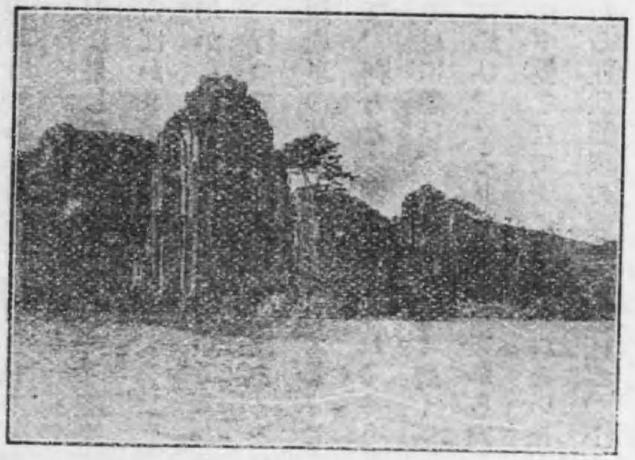
M君はかう言つてあたりを見廻すやうにした。自動車は頻りに走つた。

二九

雨は果して強く降り出して、路は時の間に泥濘になり、カヴアで蔽はれた自動車は唯行く先を見るばかりになつてゐたが、これでは叢石亭の玄武岩を見ることが出來るか何うかと危まれたが、通川から庫底里に行くと、いくらか小降になつて、これなら、そこで番傘の一二本も借りて行けば、行つて見られないことはあるまいと運轉手は言つた。

庫底里の部落に入らうとするところで、そのグロテスクな石柱が一二本海岸に聳えてゐるのを見て、何となく體のそゝられるやうな興を誘はれたが、次第に徒崖に添ひ、徒崖のかげになつてゐる村に添ひ、入江をなして碧く湛へてゐる海に添ひ、鼎の沸くやうに白く波の沸立つてゐる沙濱に添ひ、ぐるりと丘を此方から向うに拔けて、始めてその大景の一部に接した時には、私達は思はず聲を立てずにはゐられないほどの喜悅を感じた。十町ほどの間高さ七八十丈もあらうと思はれる柱狀節理の大きな圓柱が、十本も十五本もそこに並んで立つてゐるばかりではなく、また怒濤がそれに當つて凄じく碎け、綠の低い磯馴松が苔のやうに到るところに密生してゐるばかり

叢石亭玄武岩



でなく、その向うの、何うしてあそこまで行くであらうと思はれるやうな徒崖の上に、亭が一つ高く海風に曝されて立つてゐるではないか。そしてそこには大きな海鳥が風に逆らつて頻りに舞つてゐるではないか。私達は思はずそこに立留つて了つた。

『これは立派だ……。これは海金剛の比ぢやない……』

一番先にかう言つたのはM君であつた。

私もそれには同感であつた。私は何處にかうした大きな柱狀節理を見たであらうか。但馬の城崎にある玄武洞などは、これに比べれば、兒戯に均しいと思はれるくらゐだし、越前の三國の港外にある東尋坊は、さうしたものの中ではすぐれてゐるもののやうに思つてゐたが、それとてこの十分の一、二十分の一にすぎないくらゐ、規

模が小さかつた。芥屋の大門、七ツ釜、これとて、とてもこの雄大、この奇峭には及ぶべくもなかつた。

『これは、柱狀節理では、天下一品だ。金剛山の山巒よりも、溪谷よりも、もつともつと他にその類を發見することが出來ないものだ……』私はかう言はずにはゐられなかつた。

私達は凄じく怒濤の荒れてゐる岸に添つて、そのまゝ丘から丘へと傳つて行つた。兎に角私達はその叢石亭の上まで行かなければならなかつた。そこに行つてこの奇岩を瞰下しなければならなかつた。これでさつきのやうな風雨では、何んなに思つても、とても行くことは出來なかつたのであるけれども、幸に小降になつた雨は、傘なしで歩けるくらゐになつてゐた。唯、風が强かつた。岩の横角に出た時には、私は危なく帽子をさらはれさうになつた。

亭の上から見下した眺めは、天下の壯觀と言つても、決して過言ではないと思はれる位であつた。

『これは立派だ……大したもんだ……』M君も私もさう言つてそれに對した。

しかし風が强いので、長くそこに留まつてゐることは出來なかつた。それに、あまり時間を取

つて元山に着くのがおそくなるのを私達は恐れた。私達は三十分ほどで引戻した。

庫底里に行つて、私達はまだ自動車の旅を續けた。

三〇

そこに限らず、元山に行くこの街道は、絶えず海に添つて峠を越して行くやうになつてゐて、美しいシインが時々前に展開され、或は弓弦を張つたやうな彎曲した沙濱に怒濤が打寄せ、また深く入り込んだ入江に一つ二つ帆がスワンのやうに浮かび、又は峠の上から遙に太洋を望むやうなところもあつて、晴れた日ならば、いかやうにも樂しみつゝ通つて行くことが出來たであらうが、不運にも風雨は凄じく、殊に、庫底里からは篠をつくやうな土砂降になつて、ちよつとの間カブアの一ところを外しても、忽ち投槍のやうに、または銀箭のやうに斜に凄じく降込んで來るので、いかに美しいであらうと思はれる海にすら、容易に一瞥を與ふることは出來なかつた。私達は唯正面のガラス窓から雨に曇つた平凡な田舍のさまと、雲霧に包まれた山と、佗しく濡れそぼちた民家と、次第に凄まじく泥淖のやうになつて行く道路とを見るばかりであつた。

それにしても、私達は何んなにその自動車のパンクするのを恐れたであらうか。滿鐵で經營してゐる自動車ですら覺束ないのに、をりをりはパンクすることがあるのに、これは個人經營のぼろ自動車ではないか。滿鐵で二三年つかつたものを拂ひ下げたものだといふではないか。それに路も平康から長安寺へ行くのとは非常にわるく、石があるばかりでなく、ところどころに深く抉られた泥淖のやうなところもあつて、それは譬へて見れば怒濤の坌涌した中を噸數の小さな汽船で危うく乘切つて行くさまに酷肖してゐたではないか。私達は後には默つて、唯安全に元山に着くことばかりを祈るやうになつた。

私はをりをり運轉手に言つた。

『もう二十里來たかね？さうかね？まだ十七八里かね？それぢやまだ七八里駛らなければならないね？』

しかし、さうした私の言葉も運轉手には唯うるささうに見えた。それどころではないといふやうに見えた。（本當にそれどころぢやない……。旨く向うに行着けるか何うかがわかりやしない？）かう言つてゐるやうに見えた。それにしても、もしこれが途中でパンクして、何うにもかうにもならなくなつたら、それこそ何うするであらうか。豫備のタイヤをも持つてゐないこの車は、そ

のまゝそこに立往生しなければならないのではないか？私は不安な心持で、風雨の中をガタガタ動いて走つて行く自動車のさまを頭に描いた。

しかし心配したほどのことはなかつた。次第に元山への距離は近くなつて行つた。大きな峠を越した時には、もう日は暮れかけて、あたりはさびしい暗色になつたが、しかも雨はいくらか小降りになつて、下りになつてゐる路は、割合に楽に、自動車は滑らかに一直線に駛つて行つた。

安邊川の渡頭に來た時には、はや全く夜と言つて好かつた。あたりは白く茫としてゐた。向うで何か頻りに罵り騒いでゐたが、やがて針金を引寄せる氣勢がして、大きな扁平たいわたし舟がカンテラを一つ闇の中に光らせながら靜かに此方へと寄つてきた。自動車は客を乘せたまゝその舟の中に移されて行つた。

元山はもはやそこからいくらもなかつた。私達はほつと胸を撫で下したやうな心持になつた。やがて風雨に洗はれて綺麗に濡れて光つてゐる町の灯がそこにもこゝにも見え出して來た。

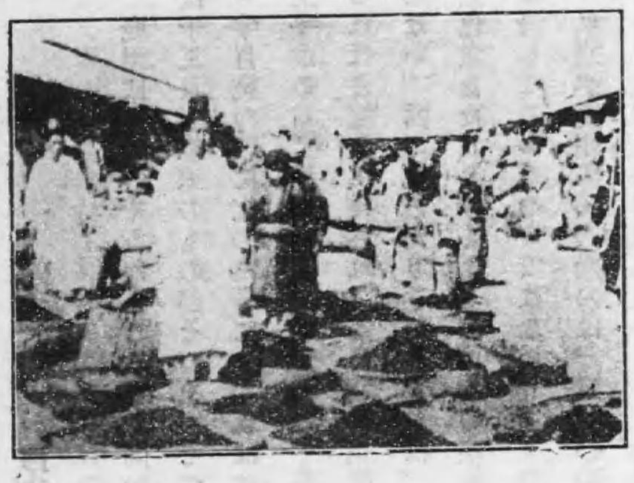
慶州見物

慶州は奈良のやうなところとは聞いてゐたけれども、これほどとは思はなかつた。そこでは私は千二百年以來のものがそのまゝそつくりと置かれてあるのを見た。

半月城の址に立つた時には、私ははつきりと千年前のさまを眼にしたやうな氣がした。そこに土手がある。濠がある。廟がある。泉水の一部であつたといふ雁鴨池がある。實際、何處にまたこれほど完全に殘されてある昔の『廢墟』があるであらうか。奈良にもそれは殘つてゐないことはない。西の京あたりを彷徨すれば、その時代の空氣を嗅ぐことは出來る。また平泉にも、あの金色堂あたりを歩くと、遠い昔の空氣の中に浸つたやうな氣分を味ふことは出來る。しかしそれは決してこゝのやうではない。こゝのやうに、そのまゝそつと置かれて殘されたものではない。

私達が慶州に入つたのは、六月の中頃であつた。もはや野は暑く、麥が黄熟してゐた。場所に由つては、已に田植に取かゝつてゐる農夫達をも見かけた。私達は夜中に大邱に行つて泊つて、

慶州町の市場



そのあくる日の朝早くそこから岐れて行つてゐる輕便車へと乘つた。

丘陵と野と交錯してゐるやうなところ、田があり畠があり橋があり里川が流れてゐるやうなところを汽車はゴトンゴトンと音を立てゝ走つた。何でもこの間は自動車で行く方が早くらあり便利でもあるといふことであつた。しかし私達は金剛山への旅行で、自動車といふものに懲りてゐた。私達は却つてこの輕便の方を乘り心地の好いものに思つた。

次第に丘陵がひらけて行つた。野があらはれ出した。何のことはない、奈良平野である。昔の都會の廢址が今にも嗅き出されて來さうな野である。

西岳驛に來ると、一層あたりがひろびろとなる。赤ち

やけた岩山がそこにも此處にもあらはれて來る。水の淺い川が流れてゐて、そこで人が大勢集つて橋普請をやつてゐる。何か懸聲をする度に大きな棒杭が動いてゐる。日がキラキラ水に流れる。

慶州驛で下りた。丁度晝だ。兎に角宿舍につかうといふので、鞄を旅舍の男に持たせて先に立たせた。

町には市が立つて、朝鮮人が大勢集つて來てゐる。

『面白いね、この市は？』

『本當だ——藤原時代もかういふ風ぢやなかつたのかな？』

『たしかにさうだ——これは好い。』

M君はとてもこれは見捨てゝは行けないといふやうに、そこに立留つて、ポケットから手帳を出して、そこらに店を出してゐる朝鮮人達をスケッチした。大きな傘。その下に並べられた生魚。泥のついたまゝの大根、芋、蓮根。かと思ふと、農具などを一面に並べた露店。その間にしやがんでのんきさうに長い烟管を持つて鼻から烟を出してゐる白衣の朝鮮人。何う見ても今の世とは

思へなかつた。藤原朝、平安朝の繪卷の中に見る光景としか思へなかつた。

M君はスケッチ帖をポケットに收めながら、

『これは好い。慶州はこんなに好いところとは思はなかつた。是非、これはもう一度やつて來て長くゐるんですな』

『さうだね。好いところだね。一ケ月ゐたいね？』

『全體の感じが好いぢやありませんか。山の具合も好いし、町も好い……』

『本當ですね』

旅舍は町を半分以上行つて右に曲つたところにあつたが、晝飯の仕度の間に、考古館だけ見て來ることが出來るといふので、そのまゝ急いで出かけて行つた。そこではW君といふ人がいろいろと說明して呉れた。例の大きな鐘は私達の目を驚かした。

そこから戻つて晝飯を食つて、今度は自動車で出かけた。一番先きに行つた寺では、千二百年來の古塔が私達の目を惹いた。何でもその塔は元はもつと高かつたのだが、中世紀にその半ばを失つて了つたといふことであつた。やがてそこを出て今度は宮殿の址の方へと行つたが、田畦の

慶州半月城趾

間は自動車が通らないので、止むなく下りて歩かなければならなくなつた。W君は先に立ちながら、『そら、こゝいらは、皆な昔、大きな寺のあつたあとです。それ御覽なさい。礎が皆な殘つてゐますから』と言つて、一つ一つそれをステッキでたゝいて見せた。

新羅の歷史といふものに就いて、あまり多くの知識を持つてゐないといふことが、次第に私には遺憾になつて來た。それを知つてゐたならば？それを知つてゐて、此處等を徜徉するのならば？それこそ何んなに愉快だらう。何んなにいろいろなことが私を動かすだらう。歌も出來るだらう。詩も一つや二つは出來るだらう。こんなことを思ひながら、麥の黃熟してゐる中を徐かに歩いた。

やがて半月城の址がやつて來た。土手が依然として殘

つてゐる。雁鴨池には徐かに千二百年來の微波がほゝゑむやうに打寄せて來てゐた。赤い雲が徐かにその影を落してゐた。

城址の中にある氷室も私達を驚かした。その中に入つて見て來たM君は、『成ほどこれが昔からあつたとすると、その時代の文化も馬鹿に出來ませんね。實際、氷室につかつたものですかね』などと言つた。

私達はそれから瞻星臺を見たり、鷄林の出現地を見たりして、再びそこに來て待つてゐる自動車へと乘つた。私達は橋をわたつて、陵を右に見て、君王が流觴曲水の宴をやつたといふ鮑石亭を見に行つたのである。

それは塵埃の多い街道から左に半町ほど入つたところにあつた。今見ては、大したものではなかつた。鮑の形をした石であることは一目でわかつたけれども、それを何ういふ風にして流觴曲水の宴をやつたかといふことはちよつと飲み込めなかつた。

何でもそれは新羅の末世の王がそこで妃嬪達と長夜の宴を張つてゐるところへ、百濟の甄萱の軍勢がやつて來て、忽ちそれを亡ぼして了つたといふことであつた。

曲水流觴宴未終
聲鼓忽聽動遙空
興亡勝敗何須說
末路可憐疽背翁

ところが、その新羅を亡ぼした甄萱が、晩年には、その子供等に虐待されて、あちこちに放浪し、最後には疽が背に發して死したといふ史實があるので、それを私は詩にして見たのであつた。

そこから私達は引かへして、今度は西岳の文武王陵へと行つた。そこにある螭首龜趺は見事なもので、日本ではとても見ることの出來ないものであつた。

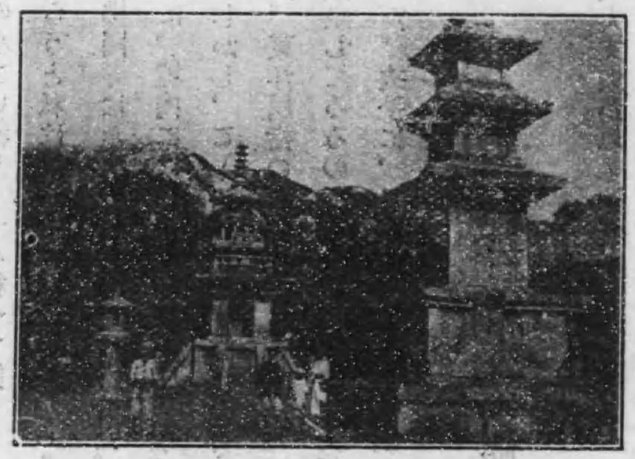
半日の豫定しか持つてゐない私達は、いくら憧憬の念に滿たされてゐても、細かにいろいろなものを探つて見るわけに行かなかつた。私達は他日を期して大抵なところで我慢して行程をつゞけることにした。

佛國寺ホテルで

佛國寺にあるホテルは、滿鮮を通じて稀に見るといふやうな眺望の好い感じの好い旅舍であつた。そこからは丘陵と丘陵との間に挾まれた野が見渡された。その野には蔚山の方へ行く汽車が煤烟を颺げて通つて行つた。赤ちやけた岩山の上には白い雲がふわふわと漂つた。

私はそこで、その風通しの好い廣間で、ホテルの主人の借して呉れた『東京雜記』と『懷古二十一都詩』とを讀んだことを忘れることが出來なかつた。新羅の歴史について少しの知識をも持つてゐない私に取つては、その二卷はこの上もなくめづらしい本であつた。私は脱解王の話だの、鷄林の話だの、鮑石亭の話だのをその中に見出した。何だかお伽噺の世界にでも來たやうな氣さへした。しかも、その跡は到る處に依然として昔のまゝに殘つてゐるのである。そこに書いてある帝王の陵は、今でもそれからそれへとたどつて行くことが出來るのである。調べれば調べるほどめづらしく面白いことが出て來た。日本の古代との交渉もはつきりそれとたどることが出來れば、神功皇后の新羅征伐などといふことについても、全く別な考へ方をしなければならないやう

佛國寺塔



な心持がした。『君、慶州は掘返せばまたいくらでも面白いものが出て來るね。S博士などが大騒ぎをするのも無理はないね。何しろ千二百年そつとして置かれたやうなところだからね。奈良とか平泉とか言つたつて、とてもこの慶州には及ばんね。是非その中もう一度ゆつくり來るんだね』『東京雜記』の頁を繰りながら、私はこんなことをM君に言つた。

『懷古二十一都詩』といふ本も、簡單に朝鮮の歴史を知るには好い本であつた。あの半島に都として榮えたところが二十一もあつたといふことは、不思議な心持を私に誘つた。いかにその歴史に變遷が多かつたかといふことが思はれた。中でも新羅の慶州、百濟の扶餘、高麗の開城、それが大きくもあり名高くもあるのであるが、その

他の小さい都も、一々行つて詳しくその事蹟の跡とを調べて見たならば、さぞ面白いことが多いだらうと私は思つた。私はそれからそれへと讀み耽つた。

佛國寺はホテルのすぐ前にあつた。感じの好い寺である。塔などにもすぐれたものがある。それに、境内には松の影が多く、盛暑でも、決して暑さを感じないやうなところであつた。

しかし、こゝに來た旅客は、是非ともその奥にある石窟寺の古佛像を見なければならなかつた。東洋屈指の石佛、尠くとも内地では見ることの出來ないすぐれた石佛が寂としてその山奥に默坐してゐるのであつた。旅客は大抵ホテルに一夜泊つて、朝早く草鞋はきでそこに出かけて行つた。次手に、日本海に輾り上る初日出を見やうとするのであつた。

石窟庵の佛像

『大丈夫かね?』

『何が――?』

『いや、虎が出るやうなことはありはしないかね?』

『大丈夫ですよ』

『だつていつ出るときまつてゐないと言つてゐたぢやないですか?』

『そんなことは滅多にありやしませんよ』

『でも、こんなところで、やられてはつまらんからな?』

『あなたも隨分神經家ですね』

實は昨夜ホテルの女が來て、一二年前に、虎が出た話をしたので、それを私は思ひ出したのであつた。その時は何んでも秋だつたさうだが、それは大變だつたといふ。初め見たのはホテルの向うの上さんだつたが、月のある夜で、夜、厠に行くと、そこに大きな虎が立つてゐる。びつくりして、それから大騒ぎになつた。二三日といふものは、何處に虎がゐるかわからないので、誰も戸外に出て行けない。それに噂が噂を生む。やれ、虎が向うの道にゐたとか、林の角に出てゐたとか、益々大袈裟になつて、誰も物が手につかない。それに、丁度その時、閑院宮がお出でになるといふので、それまでには是非何うかして置かなければならないといふことになつて、いよ

いよ虎狩が始まつた。何でも大騒ぎで、近隣總立ちといふ有様であつたといふ。しそてその虎をやつとのことで向うの斜阪のところで打つたといふ。『滅多には出ないですけども、何うかするとさういふことがありましてね？朝鮮(こちら)では？深山でなくても虎はいくらも出て來るもんですかね？』かうそのホテルの女が言つたのを私は思ひ出したのであつた。

『でも』

『大丈夫ですよ』

佛國寺の裏の林を抜けると、すぐ山路になつて、勾配も次第に急に急になつて行つた。道はさうわるい路ではなかつた。あたりもひろびろとしてゐた。また黎明の光はそれとはつきり到つてはゐなかつたけれども、山際が次第に空いて明るくなつて行つてゐるのを私達は見た。

十町ほど行くと、何うしても休まずにはゐられないほどそれほど勾配が急になつて行つてゐた十五町あたりから、やゝ右に、今度は木階になつてゐる。

そこらあたりから眺めた山脈――それもさう大して大きくも高くもない山脈、襞ばかりが細かに複雜に刻まれてある山脈が次第に曉の空氣の中にそれとあらはれて來るさまは何とも言はれな

かつた。私達は苦しい呼吸をつきながら、じつとその重り合つた山脈を眺めた。

上まで二十五六町あつた。私達はかなりに勞れた。しかし、そこに行つて、いくらかひろびろした山の屋根のやうなところに立つて、向うにひろげられた日本海を眺めた時には、私達は思はず喜悅の聲を擧げた。朝日は既に三間ほどの高さにのぼつて、遠く目さして來た波から輾り上る奇景は眼にすることは出來なかつたけれども、しかもその海の美しさは？波の激濺の美しさは？私達は唯じつとそれを見詰めた。

石窟のあるところは、もはやそこからいくらもなかつた。山のかげのやうなところを少しく行と、前は淺い谷になつてゐるやうなところに臨んで、その石窟は東面して立つてゐた。私達は迷ことなく、その石窟の中に刻まれてある大きな石佛に對することが出來た。

『ふむ』

『これは立派だ――』

私達は唯かう言つただけだつた。その端麗な顏、そのに大な表情、私達は唯見とれた。

私は長い間それが窟中に埋沒されてあつた時のことを想像した。石やら塔やらで足の踏むとと

ろもないやうになつてゐた時を想像した。何でもその時は、これがこんなにすぐれたものであるとは思へなかつたさうだ。段々片附けるにつれて、光輝があらはれ出して來たのださうだ。『大したもんだね、君。これだけのものをこの山の中につくつて置いて、そして死んだらうね』暫くしたあとで、私はこんなことをM君に言つた。

『本當ですね』

『これは石をほり拔いたんでせうかね？それとも下から運んだものでせうかね？』

『矢張、此處にあつた花崗岩を刻んだんでせうね。下から運んで來たのではないでせうね』

『えらいことだな』

佛國寺石窟庵

『兎に角、此處にこもつて、これだけのものを刻み殘したといふことはえらいことですね』

『そして、その作だけ殘つて、名は傳はらないんだからな？』

『つまり、それだから出來たんですな。名を不朽に傳へるなんていふ心持が先に立つては、とてもこれだけのものは出來ませんな』

『さうでせうな』

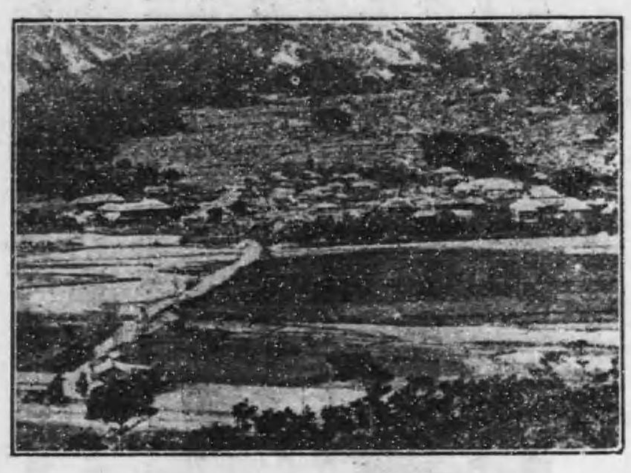
『つまり、萬衆の渴仰する佛像をつくる——それに相應した佛像をつくるといふ熱意だけで、これだけのものが出來たんですな』

『さうでせうな』

『今ぢやとてもこんなものは出來やしませんよ』

私達はその窟の周圍に刻まれてある多くの佛像の中にも、非常に線のすぐれたものや、鑿の見事なものを發見して眼を瞬つた。私達は一時間以上もそこに立つて眺めた。

東萊溫泉



歸國

その日は午前十時の汽車で佛國寺を出て蔚山へと行つた。この間は丘陵の中から海岸平原へと出て行くやうな路で、別に大して心を惹くやうなところもなかつた。歴史で知つてゐる蔚山の籠城、清正の奮闘、さうした光景の跡などは何處にも認められなかつた。唯、向うの小さな山を指して、『あそこださうですよ、蔚山の城のあつたところは――』とM君と話し合つただけだつた。これで朝鮮の家屋さへなければ、山陰道あたりの邊僻なさびしい町と思はれたに相違なかつた。それほどあたりは内地化してゐた。石見あたりの人達が澤山に澤山に來てゐるらしかつた。

そこで私達は東萊行きの自動車を待つて乘つた。この街道はかなりに旅客の往來があるらしく定期の自動車が一日三四回ぐらゐは出て行くことになつてゐて、非常に便利であつた。それに道路も金剛山あたりとは比べものにならないほど好く、瞬く間に十里近い路を走つて東萊溫泉についた。そこで私は長い旅の疲勞を一日やすめて、そしてあくる日は釜山の埠頭へと向つた。長い間一緒に歩いて呉れたM君とは、その埠頭でわかれたが、何だか兄弟にでも別れるやうに悲しくつらかつたことを今でもはつきりと私は記憶してゐる。

――完――

大正十三年十一月十一日 印刷
大正十三年十一月二十日 發行

滿鮮の行樂
金貳圓八拾錢

著者 田山錄彌

發行者 東京市日本橋區數寄屋町 濱井松之助

印刷者 東京市神田區三崎二丁目十番地 三澤善哉

東京市日本橋數寄屋町
發兌 大阪屋號書店
振替東京一三七五番
電話大手三七三七番

株式會社 林館印刷所

上田恭輔著　趣味の支那叢談　定價貳圓五拾錢　書留送料十七錢

後藤朝太郎著　支那趣味の話　定價貳圓三拾錢　書留送料十七錢

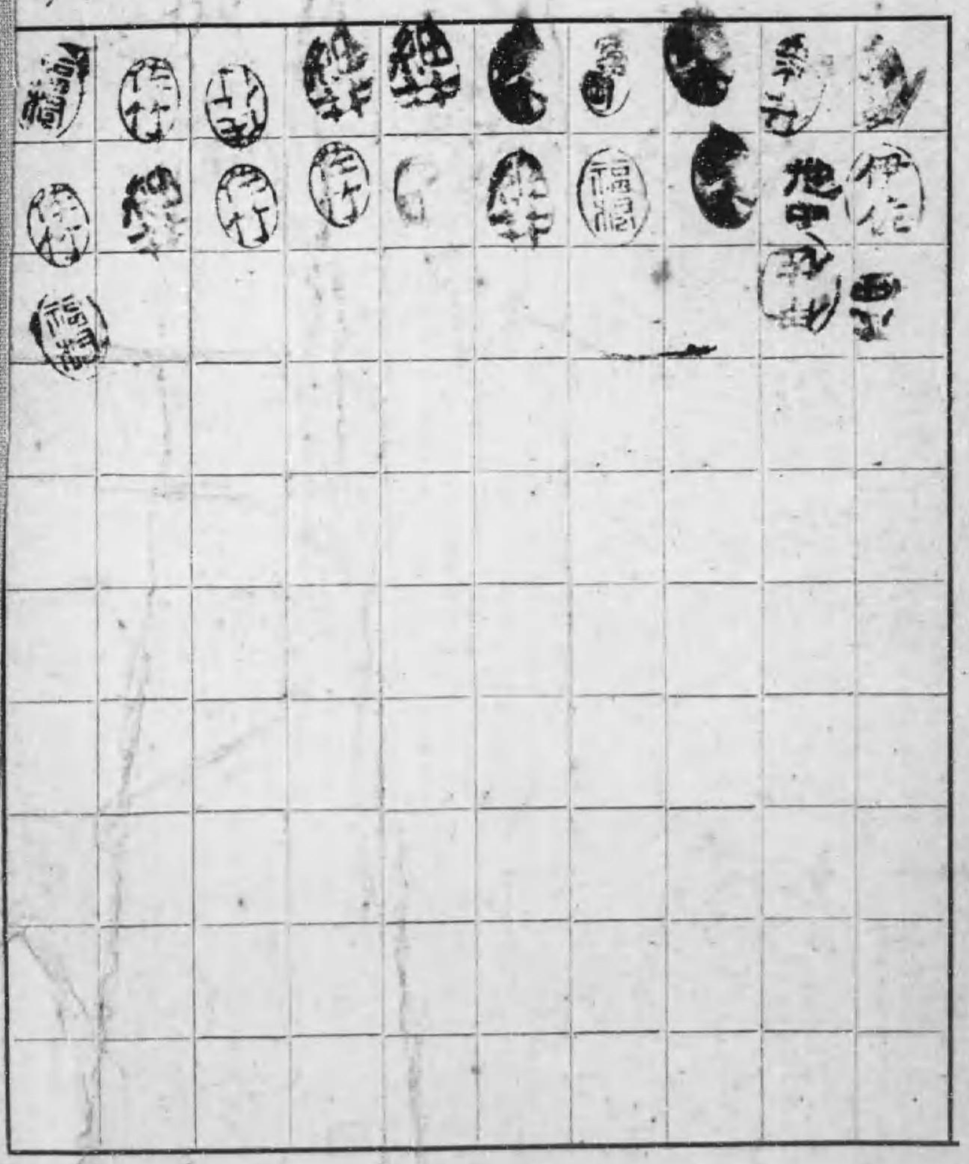
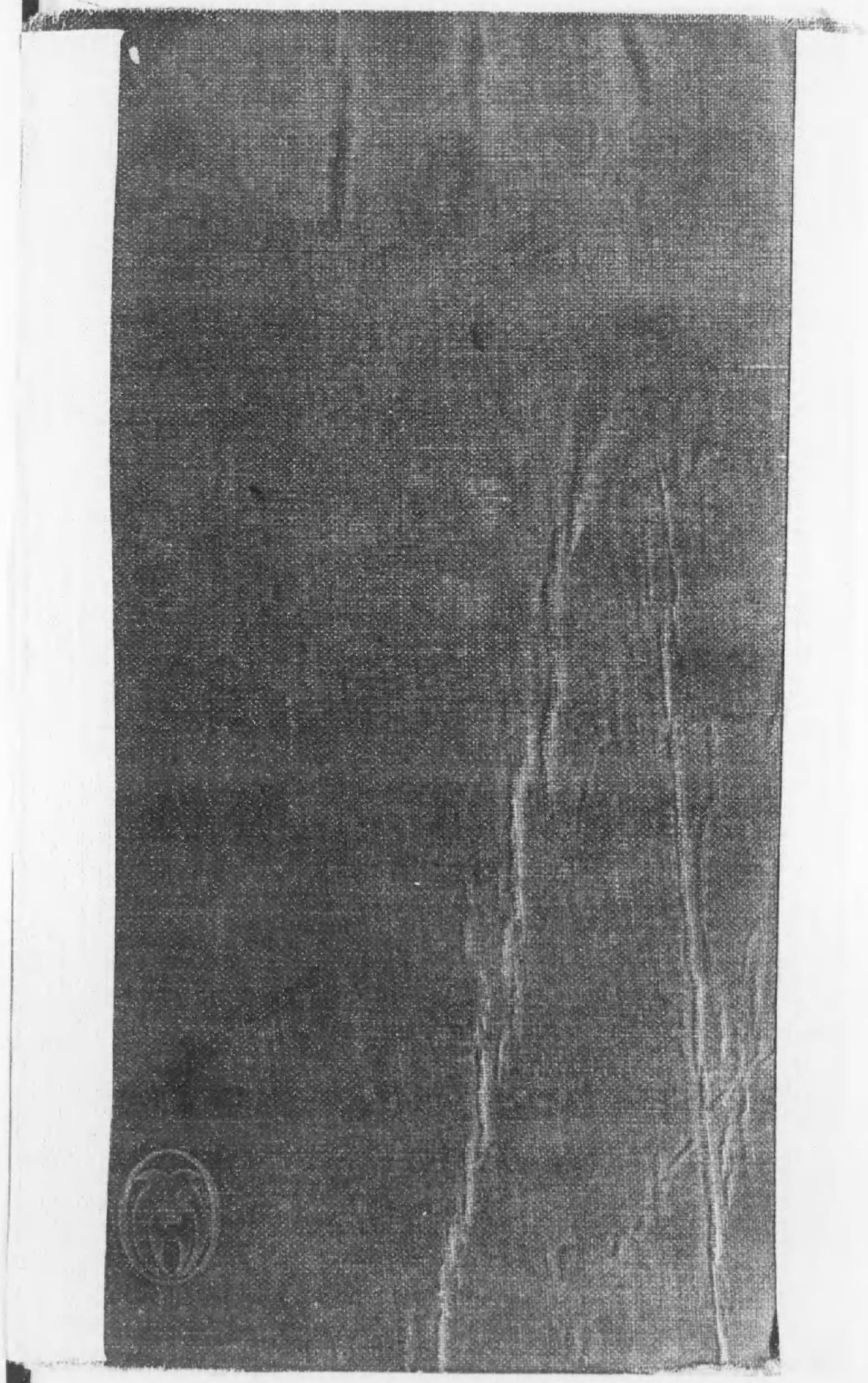
平野博三著　滿鮮の車窓から　定價壹圓八拾錢　書留送料十五錢

清水安三著　支那當代新人物　定價貳圓　書留送料十七錢

532

24

14年 1月 10日



終